

大須賀鬼卯著『東海道人物志』に見られる能楽愛好者

——能楽の伝搬と街道沿いの数寄者達——

飯塚 恵理人

一 はじめに

近世、能楽師が江戸・京都などに旅行することはかなり多かった。名古屋に京都住・江戸住の能楽師が来て能の催しを行うことも多々あった。これらの東西の能楽師は名古屋に来ることを目的にしていたものばかりではなく、旅の途中に名古屋によったという者も多かった。俳諧師が所々の同好者・同業者の家を宿所として、そこで会をもったように、能楽師も旅を続ける途中に愛好者・同業者の家を宿所として、そこで囃子会・狂言会を持ったり、あるいはその主人に教えたりということがあったのである。そしてこのような能楽師の旅が能楽の伝搬に大きく寄与したと考えられる。旅を行う上ではこのような同好者・同業者に連絡をつけておくことが、能楽師にとっても重要なことであったと考えられる。このような時に役に立つのが、その道中沿いの各宿場に、どのような芸を得意とする人物がいるかということを書き記した人名録である。『東海道人物志』（以下『人物志』と略称）は掛川の住人であった大須賀鬼卯が纏

めた人名録で、享和三（一八〇三）年の奥書を持ち、京都（菊舎太兵衛）・大阪（播磨屋九兵衛）・江戸（須原屋茂兵衛）の共同企画である『三都書林』より刊行されたものである。本稿では、この『人物志』より能楽関係者を抽出し、そこから近世の能楽の普及と伝搬の問題について考えてみたい。なお、『人物志』の底本は、刈谷市立図書館村上文庫本を用いた。但し、序文・凡例等の引用は『静岡県史 資料編15』の翻刻によった。

二 『東海道人物志』と大須賀鬼卯

この『人物志』を著した大須賀鬼卯については、同書の富小路貞直^{（注1）}の序文に、

とほつあふみの国なる日坂といへるわたりに、栗杖亭とから名つけて、白樗のしろきを後にする事を家わさにしつゝ、芭蕉のかせをしも、つたへし人あり、もとより、おほきひしりのをしへをもかしこみて、千磐破人をしらざる事をうれたむこゝろ、いとふかく物しければ、あら玉の此年ころあし曳のやましろの国より、鳥かなくあつまにいゆきかよふ小余綾の、いそちあまりみつのはゆまちわたりにて、玉はこの道くになたかき人くをとふらひつゝ、こたひそれかなすわき、われかすむ国、それか氏名までも、夕月夜、おほつかなき所なく、降つむ雪のいちしろくかきあつめ、板にゑりて、瓢形の天の下に、ほどこらさむ

とある。鬼卯は、この序文に「芭蕉のかせをしも、つたへし人」とあるように、特に俳諧を好んでいたようである。

また、同書の江戸の臨海春蟻の序文^{（注2）}には鬼卯について「もと河内の隠士にして、今画を業とし、俳諧狂歌をこのむ」と述べている。それらの教養人同士には、それぞれの同好者のネットワークが必要であつた。鬼卯がこの『人物志』

を纏めたきっかけも、最初は自らが交際し、連絡をとりあつた教養人を集めたものと考えられる。

この鬼卯が日坂の住民であつたことは、この『人物志』記載の人物に大きな影響を与えている。このことについては、『掛川市史』^{注3)}に、

『東海道人物志』は、巻末の追加までいれると、六四三^(一、二、三)名の人名・寺名をのせている。そのうち、日坂宿・掛川宿所載の近世文化人は(中略)、日坂宿二七名・掛川宿六六名、合計九三名、全体のなかの比率は、約一四・五パーセントとなり、相当の高率である。むろん、このことは、撰者の居住地からみて、知識と調査の偏りがあつたとみるべきで、必ずしも一九世紀初めの東海道文化人地図を客観的に表現したものとはいえないだろう

とある。無論この人数的な偏りからも、この『東海道人物志』が当時の東海道の文化人を公平に網羅したものとは考えがたい。しかしながら、それでもなお、こと能楽に関する限り、この書から判明することはかなり多い。

鬼卯は、『人物志』の凡例に、^{注4)}

一名高き人々も、駄路より道の程、二里に余りつるはいれず、さまでは旅路のわつらはしきを、いとひ侍れはなり

一 城との藩中にも、名高き人々もあなれと、もらしつるは、御門の内へあたし人、入たまはねはなり

一 武術は 公を恐れて、もらし侍る

一名ある人の、此草紙にもれぬるもあるは、風人の訊んことをいとひて、しゐて加入をゆるさず、或はやまひといひ、或は宿にありながら、他へ行しなといひて、出会たまはねは、本意なく書もらしぬるもあなり

享和三年亥初冬

と記している。この凡例でとくに注目されるのは、「名ある人」であつても「風人の訊んことをいとひて、しゐて加入をゆるさす」という人がいたと記していることである。これはこの『人物志』が単に有名な人物を列挙することを目的としているのではなく、それを見て「風人」がその人を訪れることを、記載された人物も期待していることを示している。また、この凡例に「他へ行しなといひて、出会たまはねは、」書き載せることが出来ない人がいたと書かれており、これらの記載人物については鬼卵自身が原則として面識があつたと考えてよい点が挙げられる。そして、鬼卵が『人物志』に収めた芸能は、その目録^(注5)を挙げると、

○目録

皇学 歌人 漢学 詩人 仏学 医学 外科 曆学 天文 算学 連歌 狂歌 俳諧 音楽 琴 箏 碁
書画 香 茶道 立花 生花 印章 蹴鞠 将棋 双六 猿樂 浄瑠璃 三弦 小唄 古書 古画 古銭
石品 扇面

となる。しかしながら、実際にはこの枠に納まらない芸を持つ人物も、この『人物志』には収められている。これに關しては『静岡県史 通史編 4 近世二』^(注6)に

特殊な表記として、静岡県下では、「著伊豆誌」「著駿河名勝志」「製初雁皮紙」「建小島碑」「五才ヨリ詠歌」「冷泉家門人・冷泉家流」などの例もある。かくて「目録」よりも標榜する看板の表記は増加したのである。

この表記とは、序文にいう各宿駅における「和漢の芸術をたしむ非常の人」が「おのかし、このめるわさ」、その「わさ」である。「項目」と「わさ」との数の落差はいかなることを意味するか、ということを見ると、おそらく登録者の意向を踏まえたからであろう。つまり、第四か条にいう面会謝絶の者の意向を尊重することと同様に、当時の出版事情、たとえば俳諧連歌の結社や類題和歌集など、個人による編さんの際の例からしてわかるように、

登録者は掲載料を支払っていると思われるから、その者の自己主張は容れられたはずである。たとえば日坂駅の石川為蔵（依平）の場合、『冷泉家御門人、五才ヨリ詠歌』と記されていることくである。もともと、石川依平は享和三年当時、一三歳であり、近親者の意向が反映していることも考えられよう。

と述べられている。『人物志』は、それに記された人物が自らの意志に依って登録料を払って登録していると考えられること、そして一三歳の子供のように、掲載当時に技量の面では優れていないに違いない人物も載せていることは注意されてよいだろう。

また、これらの目録に載せられている芸のうち、「浄瑠璃」「三弦」「小唄」は本編には載せられず、「追加」の部分に収録されている。追加に収められている芸の項目はこの三種に加えて「横笛」「八人芸」「川崎音頭」となる。これらの芸は数寄者の芸と言うには俗なイメージがあつたため、本編ではなく追加に記したという事情が考えられる。『人物志』では本編に載りながら、追加にも記される人物が四人ある。『人物志』には、本編六〇二名、追加三五名の名がみられ、単純に集計すると六三七名になるが、ここから重複する四名を除き、六三三名に関する情報が載っていることとなる。

掲載されている芸は非常に多分野に亙るが、これらの芸の特徴はいずれも一人で行う性質のものではなく、職業人・愛好者の複数集まって情報交換をすることが必要である点であろう。専門家を受け入れる愛好者は、必ずしも自らが優れた技量を持つ必要はなく、嗜み・趣味としてその芸を楽しんでいると言ったふうであつたのではなからうか。近世の芸能の一つの特徴として、専門家の旅と、それを愛好する街道沿いの数寄者との交流によって、文化が東西に運ばれたとも言うことがあり、この様相が『人物志』により窺うことができるのである。

三 東海道の能楽拠点

『人物志』に記された人名は、鬼卯の交友圏から駿河・遠州で総人数の半分近くをしめるという偏りがあるが、それでも東海道添いの宿場について、どの宿場からもできるだけ人数的に偏らないようにという配慮をしていると思われる。五三宿を通して、能楽に関係する人物として挙げられているのは、乱舞一七名、謡一名、笛四名、小鼓七名、大鼓五名、太鼓五名、狂言四名となる。但し、掛川の岡田三右衛門は謡・狂言の二種がともに載るので、人数としては総数五二名となる。「乱舞」と「謡」が分けて載せられていることから、技量はともかく「乱舞」はシテ方として立つて舞う人、謡は地謡方（もしくはワキ方）と一応考えておく。無論、今後これらの人物が関係した能番組・謡講の資料がないか、調査する必要があるだろう。

国・宿別に挙げられた能楽関係者の分布を（表1）に、挙げられた人名を（表2）にまとめてみた。まず、武蔵・相模には能楽関係者として載る人物がない。伊豆には一名、駿河には一四名、遠江には一四名、三河には四名が挙げられる。尾張には記載される人物がない。伊勢には一四名、近江には五名が挙げられる。『人物志』には、武蔵・相模の人物で能楽の関係者はなく、その点でこの地域の能楽事情はわからない。また、尾張に記載されている人物がないのは、宮から離れているために名古屋の人名が記載されていないためである。しかしながら、この表から、東海道沿いで能楽に関係する人物は、ある程度同じ宿場に集中して居住していることが類推できる。三名以上の能楽関係者が記載されているのは、駿河の嶋田（二一名）、遠江の掛川（六名）・見附（三名）・浜松（三名）、三河の吉田（四

名)、伊勢の桑名(六名)・四日市(六名)、近江の大津(四名)の八箇所である。これら複数の愛好者がいる宿では、能そのものが行われていないとしても、少なくとも囃子会や謡講はあったと考えるのが自然であろう。このうち三河の吉田(豊橋市)に関しては、安海熊野神社の能面・装束を中心に研究が行われているが、それ以外の宿については、まだ能楽史研究の対象にはなっていないように見受けられる。特に注目されるのは、能楽関係者一名を数える鳴田である。『島田市史』^{注7)}には、

この乱舞と俳諧・漢詩がそれぞれ七名で最も多く、これに次ぐのが書道・碁の六名、和歌の五名になっている。これらの文芸は当時の中央文化に直接つながるものであり、その他の諸文芸もまた同じであった。これを隣接宿駅の藤枝・金谷及び府中に比較して見ると(中略)島田にだけあって他の三駅にあげられていないのは、乱舞・小鼓・大鼓・碁・古銭・印章であり、特に乱舞は武家階層のたしなむ能楽に関連するものとして、庶民芸能とは異なるものがあつた。にもかかわらずこれをよくする者が七名に上り、島田本陣の三家置塩・大久保・村松を中心に行なわれていたことは、これら武家階層の芸能が、やがて庶民階層の中におりてくる地方文化の変質の推移を語る興味深い資料ともいえよう。

という指摘がある。能楽が江戸前期において「武家階層のたしなむ」ものであったと限定してとらえてよいのかは、まだ検討する余地がある。しかしながら、全国的にみて、富裕な町人階層が積極的に能楽に関わる文化・文政期以前に、これだけの人数が能楽を嗜むと記されている宿場町があつたということは、確かに注目すべきことと思う。鳴田に当時の能楽の番組が残されているか、あるいは謡本・能面などがあるかは今後調査する必要があるだろう。

『人物志』には笛の徳田吉次郎の一名しか載らないが、近世後期から明治時代の能楽を考える上で重要なのが静岡

(府中)の能楽事情である。中村羊一郎氏は、「東海道駿府城下町(下)^(注8)」において「駿府市中および周辺における興行と開帳」と言う年表をまとめておられる。これに載る能楽の催しを抜粋して挙げると

興行年月日	内容	場所	中心人物
正徳 三(一七二三) 年 二月一日	能	雷神社	
享保 一(一七二六) 年 三月 四日	能	通町	
享保 一(一七二六) 年 一〇月	囃子	善念寺	
享保 二(一七二七) 年 四月二日	囃子	浄光院	
享保 二(一七二七) 年 一〇月一日	能	浄源寺	
享保 一六(一七三一) 年 六月二日	能	少将社	長谷川伊織
享保 一九(一七三四) 年 九月一七日	仕舞・囃子	報土寺	
享保 一九(一七三四) 年 冬	能	西福寺	
享保 二〇(一七三五) 年 閏三月二六日	能	少将社	山下一学
寛保 一(一七四一) 年 三月二〇日	勧進能	少将社	
宝暦 六(一七五六) 年 六月二日	勧進能	妙像寺	
宝暦 六(一七五六) 年 閏一月 六日	稽古能	西教寺	
宝暦 七(一七五七) 年 五月	稽古能	報身寺	

の一三回となる。これが四十年以上にわたる記録であることを考えると、少ないようにも見えるが、能楽の催しは、

能であっても囃子・仕舞であっても、実際には発表会のような性格が強く、その裏に、愛好者の稽古の蓄積があつて行われる。このことを考えれば、駿府には享保から宝暦にかけての時期に相当数の能楽愛好者がいたことが類推される。そしてここに「勸進能」「稽古能」とあるのは、当時の慣例から、実際にはチャリティーでも稽古でもない、玄人が入場料をとって行う興行を指していると考えられる。当時の駿府では能が興行としても成り立つだけの地盤があつたと思われるのだ。享保年間には、能楽も相当に浸透していた。文化・文政期の文化は、このような蓄積の上に成り立ったと言えるだろう。

静岡の江戸期の能楽についての先行研究としては鈴木正鍊の「静岡の謡曲」^{注9)}がやや詳しい。ただ資料の関係から徳川家康の静岡在住時の記述があるもののその後幕末までの記事がない。幕末の静岡に能楽を好んだ人がいたことは、鈴木氏（前掲）が、

野崎彦左衛門貞利は、幼名を直次郎といひ、後徳成と改め、詩歌俳諧書画插花等の趣味深かりしが、観世流の謡曲を好み、人にも教へたといふ。明治十一年二月、七十一歳にて没す。（中略）

岡野源七は静岡と号し、安西三丁目に住ひ、謡曲小鼓を好くし、駿府城中の士分の人々にて、師事するもの多かりしといふ。（中略）

萩原四郎兵衛久訓は鶴夫といひ、土太夫町に住ひ、町頭の役を勤め、名字帯刀を許さる。後第二十六国立銀行静岡支店の支配人となり、明治十九年七十余歳にて没す。観世流の謡曲を楽しまれた。

野呂傳左衛門ハ本通貳丁目に住み、桑名屋といひ、先祖は今川の家臣であつたが、永禄年中町人となり、小間物太物商を営み、謡曲を嗜んだ。此人は新庄家の別家太郎兵衛（新庄家の二代仁右衛門の弟）の二男で、初め助五郎といひ、野呂家の養子となり、文化四年八月八十二歳で没す。（中略）

小杉将監は、浅間神社の神官で、謡曲を好んだ。

栗田嘉兵衛は宮ヶ崎町住み、謡曲を好んだ。(中略)

此外、指物屋和助(宮ヶ崎町に住む) 森新七(御器屋町で深江屋) 興津某(西草深町) 中川飛驒守、建部藤十郎、豊藤某女などの名が傳つて居る。

と挙げられている。いずれも、士分・商人であつて玄人としての能樂師ではない。特に商人など静岡の「町衆」に能が広まっていたこと、これらの人が素人に謡曲を教えていたことは重要であらう。

四 終わりに

以上、『東海道人物志』を中心に、能樂の伝搬と地方の能樂愛好者の存在、江戸中期の宿場町と能樂の拠点について考えてみた。能がその土地固有の芸能とはならず、全国に普遍性・共通性を持つ舞台芸能となり、そして現代にまでその形で伝えられたことは、能樂師が各地方に旅をして、能・謡を教えたからに他ならない。この意味で、能樂師の旅は能樂の地方への伝搬を考える上で無視できない要素である。そして、一方、それらの能樂師より教えを受ける地方の数寄者・愛好者の存在も無視できないであらう。このようなことを考える上で、『人物志』のような人名録は非常に有益な資料であると言える。これと同様の人名録は、少し時代が下るが『伊勢人物志 南勢之部』(天保五年五月中旬発行 書林 松坂職人町深野屋利助 刈谷市立図書館所蔵)が存在する。この本にも能樂関係者が記される。今後、これらの人名録を地方ごとに広く収集し、地方の数寄者の能樂との関わりについて考えて行きたい。

また、街道と能楽の伝搬という問題を考える上では、東海道のような幹線のみではなく、その脇街道や裏街道の存在を考慮する必要があるだろう。例えば、浜松や新居を経ずに、見付から浜名湖の北側を廻り、三ヶ日を経て御油へ抜ける道があった。これは姫街道と呼ばれている。この三ヶ日に服部姓の能楽師がいた。そして服部氏と、三ヶ日から山をへだてた新城の祭礼能は関係が深かった。このことについては、大原紋三郎氏^{注10}が「服部友清は古くから遠州三ヶ日の大福寺に寓居して、この地方の能を指導していた服部三左衛門の子で源右衛門と称した。宝永五年父三左衛門が新城で勧進能興行の時にも同行し、宝暦五年の祭礼能に式三番叟を上演し翁の役を勤められた。この時、友清は八十八才で、三年後の宝暦八年に九十一歳で亡くなった。この後、安永四年と五年に出演の記録のある甲門はこの友清の子と思われる。」と述べておられる。また、東海道の宿駅以外に、その周辺の町村が準宿場的な機能を持って発展したことも考慮に入れる必要があるだろう。嘉永五（一八五二）年の三代豊国の「東海道」^{注11}は宿駅の間を描いているが、その宮・桑名間は名古屋としている。これは二代国貞の「東海道 名所之内 名古屋」^{注12}も同様である。宮から直接桑名へ渡るのではなく、名古屋から佐屋廻りで桑名へ廻る道があり、こちらを通る旅人も多かった。また江戸から京へ行くのに全て東海道を通る必要はなく、名古屋から大垣に抜けて中山道へ抜けることもできるのである。

能楽史の研究は、現在能楽堂があり、能が催されている土地のみを対象とすべきではない。『人物志』を検討して、特に静岡県については能楽資料の調査をする必要を強く感じた。たとえば、静岡市には、戦災で焼失したが、大正二年四月に西草深町の野崎彦左衛門邸の屋敷内に四百余名を収容できる静岡能楽倶楽部という能楽堂が設立されていた。この静岡能楽倶楽部の活動に関しては静岡県立中央図書館（静岡県立葵文庫）に所蔵されている静岡市史料（一七）『思い出の能舞台』（昭和四一年 企画部文書課 市史編集室）が詳しい。この内容は、能楽堂の再建を祈願して野崎衛七が昭和三四年に纏めた、この能楽堂で催された能番組と出演した能楽師・愛好者の記録である。残念ながら、

静岡市には現在能楽堂はない。しかしながら、静岡県には、江戸中期以降、能楽史の表面にはでないものの、能楽を支えた人々がかなりいたように思われるのである。これらの内容に関しては、明治維新期の観世清孝の静岡移住に関する資料とともに別稿を期したい。

注

- 1 『静岡県史 資料編15 近世七』 編集・発行 静岡県 平成三年三月発行 七三五頁
- 2 同注1 七三六頁
- 3 『掛川市史 中巻』 掛川市史編集委員会編集 掛川市 昭和五九年二月発行 一一四九頁
- 4 同注1 七三六―七七頁
- 5 同注1 七七頁
- 6 『静岡県史 通史編4 近世二』 編集・発行 静岡県 平成九年三月発行 三六四―三六五頁
- 7 『島田市史 中巻』 島田市史編集委員会編集 島田市役所 昭和四三年八月発行 七六四―七六五頁
- 8 『東海道駿府城下町(下)』 中村羊一郎 『東海道ルネッサンス文庫』 中部建設協会 平成九年三月発行 一三三―一三四頁
- 9 『静岡の謡曲』 鈴木正錬 『静岡県郷土研究』 第十二輯 昭和一四年三月発行 『静岡県郷土研究』 第六卷所収 静岡県郷土研究協会編 国書刊行会 昭和五七年五月発行 一四四―一四五頁
- 10 『新城祭礼能番組帳解説』 大原紋三郎 私家版 平成八年五月発行 二六頁
- 11 『浮世絵 大東海道 上』 大野和彦 京都書院アートコレクション一九二 京都書院 平成一〇年九月発行 一二九頁
- 12 『浮世絵 大東海道 下』 大野和彦 京都書院アートコレクション一九三 京都書院 平成一〇年九月発行 一五五頁

付記

貴重な資料の閲覧を許可頂きました刈谷市立図書館に心より感謝致します。本稿作成に当たりまして貴重な御教示を頂きました、大倉流大鼓方寛鈺一先生、新城市在住大原紋三郎先生、筑波大学名誉教授芳賀登先生、静岡県立吉田高校校長中村羊一郎先生、静岡歴史文化情報センター職員松本稔章先生、富士市立博物館芸芸員荻野裕子氏に心より感謝致します。本稿は平成一一年度稲山女学園大学学園研究費助成(B)による成果の一部となります。

大須賀鬼卯著『東海道人物志』に見られる能楽愛好者

(表1) 『東海道人物志』に記載される能楽愛好者の人数

番号	国名	宿場名	本篇	追加	総計	能関係	乱舞	謡	笛	小鼓	大鼓	太鼓	狂言	備考
1	武蔵	品川	13	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	
2		川崎	11	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	
3		神奈川	10	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	
4		保土ヶ谷	5	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	田口兵右衛門は追加再出
小計			39	1	39	0	0	0	0	0	0	0	0	
5	相模	戸塚	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
6		藤沢	9	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	
7		平塚	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
8		大磯	6	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
9		小田原	15	1	16	0	0	0	0	0	0	0	0	
10		箱根	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計			37	2	39	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	伊豆	三島	31	0	31	1	0	0	0	1	0	0	0	
小計			31	0	31	1	0	0	0	1	0	0	0	
12	駿河	沼津	7	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
13		原	4	0	4	1	1	0	0	0	0	0	0	
14		吉原	3	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	
15		神原	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
16		由比	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
17		興津	10	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	
18		江尻	7	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
19		府中	18	3	21	1	0	0	1	0	0	0	0	
20		丸子	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
21		岡部	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
22		藤枝	6	1	7	1	0	1	0	0	0	0	0	
23		嶋田	30	0	30	11	7	0	0	3	1	0	0	
小計			94	5	99	14	8	1	1	3	1	0	0	
24	遠江	金谷	14	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	
25		日坂	26	1	26	0	0	0	0	0	0	0	0	伊藤徳兵衛は追加再出
26		掛川	63	3	65	6	3	1	0	1	0	1	1	謡・狂言は同一人物の兼 岡田十平は追加再出
27		袋井	17	3	20	2	0	1	0	0	0	1	0	
28		見附	31	5	36	3	1	2	0	0	0	0	0	
29		浜松	18	2	20	3	1	2	0	0	0	0	0	
30		舞阪	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
31		新居	7	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
32		白須賀	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計			183	14	195	14	5	6	0	1	0	2	1	
33	三河	二川	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
34		吉田	41	2	43	4	1	1	0	0	1	0	1	
35		御油	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
36		赤坂	8	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	
37		藤川	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
38		岡崎	11	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	
39		池鯉鮒	6	3	9	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計			71	5	76	4	1	1	0	0	1	0	1	
40	尾張	鳴海	12	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	
41		宮	14	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	
小計			26	0	26	0	0	0	0	0	0	0	0	
42	伊勢	桑名	20	5	24	6	1	0	1	1	1	2	0	田村喜代八は追加再出
43		四日市	30	2	32	6	1	1	1	0	1	1	1	
44		石薬師	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
45		庄野	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
46		龜山	6	0	6	1	0	0	1	0	0	0	0	
47		關	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	
48		坂下	3	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0	
小計			68	7	74	14	3	1	3	1	2	3	1	
49	近江	土山	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
50		水口	8	1	9	1	0	1	0	0	0	0	0	
51		石部	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	
52		草津	9	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	
53		大津	29	0	29	4	0	1	0	1	1	0	1	
小計			53	1	54	5	0	2	0	1	1	0	1	
合計			602	35	633	52	17	11	4	7	5	5	4	

*「番号」欄には江戸を起点とした場合の宿場の通し番号を記した。

*掛川の岡田三右衛門は謡と狂言と両方記されている。そこで、謡・狂言の項目ではそれぞれの項目で1名として数えたが、能関係人数としては1名として数えた。このため、能関係人数の合計は52名だが、乱舞から狂言までの各項目の人数を合算すると53名となる。

*追加は宿場でない地名に人名が記されていることがある。この場合、次の宿場名が記されるまでの間に書かれた地名を付された人名は、すべて前の宿場の人名として扱った。

*追加に記載される35名のうち4名は本編にも名前がある。これらは本編・追加ともそれぞれの欄で人数に数えたが、総計の際には1人として計算した。

(表2)『東海道人物志』に記載される能楽愛好者名

番号	国名	宿場名	役籍	名	字	号	通称	他技能	地名	流儀
11	伊豆	三島	小鼓	保		一色亭	渡邊彦左衛門	茶道	熱海	
13	駿河	原	乱舞			蕃雨	渡邊曾平			
19		府中	笛			抱一斎	徳田吉次郎	画		
22		藤枝	謡				大塚甚左衛門			
23		嶋田	乱舞	貞康	孟簡		岡本勘吉	詩書	谷川	
			乱舞	徳郷	君臨	廣菴	置鹽幸三郎	印章		
			乱舞			柴雨菴	大久保自寛	茶道		
			乱舞	寛管			村松九郎次	和歌		
			乱舞	瑞	公圭	苾堂	桑原伊右衛門	書		
			乱舞	清遠			和田長四郎	画		
			乱舞				飯塚太助	碁		
			小鼓				長谷川如圓軒			
			小鼓	盛聲	公聞	寸苗菴	伊東主膳	医・香道・茶道		
			小鼓			驛路鈴成	秋山仁兵衛	狂歌		
			大鼓				大石民八			
26	遠江	掛川	乱舞			柿橙人	澤野弥三左衛門	狂歌		
			乱舞				中山金藤次		舞木	
			乱舞	惟徳	子録		小澤富三郎	碁	本郷	
			謡・狂言				岡田三右衛門	謡・狂言を兼		
			小鼓				伊東祐九郎			
			太鼓			馬水	小澤喜之次	中将棋	本郷	
27		袋井	謡				大橋六兵衛			
			太鼓	政方			加藤與左衛門			
28		見附	乱舞				矢田無一		山梨市場	
			謡				山田徳左衛門		中泉	
			謡				半場又八	碁	池田	
29		浜松	乱舞			陶々斎	小澤玄澤	音楽		
			謡			千砂	川上助九郎	生花		
			謡				若森長右衛門			
34	三河	吉田	乱舞			兎堂	植田七三郎	俳諧		
			謡				大山次左衛門			
			大鼓	義方	子植	一蓬舎・古帆	植田栄作	漢学・国学		
			狂言			不掃園・李成	山本彦七		下地	
42	伊勢	桑名	乱舞	周豊			松岡庄九郎		震岡	観世門人
			笛				矢田甚右衛門			
			小鼓				山口喜左衛門			
			大鼓				山口喜一			
			太鼓			牡丹亭・架橋	丹羽善九右衛門	俳諧		
			太鼓			月菴機・工十	工藤十右衛門	俳諧		
43		四日市	乱舞				太田吉左衛門			
			謡				村田武右衛門	碁		
			笛				吉田角左衛門			
			大鼓				森寺幸助			
			太鼓				黒川彦左衛門			
			狂言				鈴木吉兵衛			
46		龜山	笛				斎内長興	俳諧・医業		
48		坂下	乱舞				高屋傳右衛門			
50	近江	水口	謡				堀井茂助			
53		大津	謡				今井栄蔵			
			小鼓				中川勇蔵			
			大鼓				澤文内			
			狂言				川嶋弥三郎			